

高倉健没後10年：文化勲章の陰に降旗康男

上原 昇 (2組)

11月3日といえば文化の日で、文化勲章の日でもある。

文化勲章と言えば、2013年、高倉健（1931–2014、福岡県出身、以下健さん）が受賞して話題になったが、映画俳優としては森繁久彌に次いで二人目とか。

今年は健さんが亡くなって10年目で、各所で記念上映が行われている。

筆者は丸の内東映（この劇場は来年5月に閉館）で開催中（11月7日から11月22日）の「没後10年 高倉健特集上映 銀幕での再会」に足を運び、「鉄道員 ぼっぼや」（2012年公開）を観てきた。

https://www.toei.co.jp/entertainment/news/detail/1244006_3483.html

健さんと言えば東映ヤクザ映画全盛期、背中に刺青を入れて切った張ったの大立ち回りを思い浮かべる。筆者も若い頃、健さんの「日本侠客伝」（1964年から71年で11作）、「昭和残侠伝」（1965年から72年で9作）シリーズなどよく観たものだ。

ただ、さすがにこうした映画では、いくら人気があっても文化勲章はもらえない。

1976年、東映を辞めてフリーとなった健さんは、山田洋次監督作「幸福の黄色いハンカチ」（77年公開など）や森谷司郎監督作「八甲田山」（77年公開）などの映画で、名監督と組んで、ヒューマンタッチの世界で厳しい運命と戦う男を演じて、映画俳優としての芸域とファン層を広げてきた。

某映画評論家が健さんの「東映ヤクザ映画時代を“裏世界”、その後の時代を“表世界”」と呼んでいたのも頷ける。

そんな健さんを裏と表でずっと支え、コンビを組んできた長野県出身の映画監督がいる。映画好きな人はご存知かと思うが、降旗康男（1934–2019、東筑摩郡本郷村生、松本深志高校⇒東大（仏文）卒）である。

降旗監督の父親、徳弥（1899–1995）は衆議院議員で第2次吉田内閣では逓信大臣を務め、1957年からは松本市長を歴任している。

東映生え抜きの降旗は健さんと生涯20本の映画を撮っている。

特に健さんがフリーになってからの降旗映画は傑作といわれる作品が目白押しで、筆者も公開されるたびに映画館に駆け付けたものだ。

健さんの遺作となった「あなたへ」（2012年公開）も降旗監督によるものだ。

話を文化勲章に戻すと、健さんの受賞は、上記の監督たちに加え、降旗監督との作品群の評価に支えられているところが大きいと思えてならない。

それらの作品の幾つかは公開年の主要な映画賞を獲得している。

映画雑誌「キネマ旬報」ベスト10 特集では、「駅 STATION」(81年)が読者選 Best1、前述の「鉄道員 ぽっぽや」は読者選出 Best1 と健さんが主演男優賞を受賞している。

“高倉の文化勲章の陰に降旗あり”である。

二人とも亡くなって5年、10年経つが、作品はスクリーンの中で生き続けている。

(2024年11月16日記)



「高倉健没後10年 特集上映」
丸の内東映で



映画「鉄道員 ぽっぽや」ポスター

降旗康男監督

